

# ((( ポイス )))

神歯学では国家試験対策がいろいろ講じられているようである。来年はいい結果が期待できそうだ。合格率さえ平均を超える事ができれば研修センターという強みがある。

我々、神奈川県同窓会員はそこで研修を受けた歯科医師に「腕がいい」という評判が立つ事を願っている。

日本の歯学臨床実習の方法には2つある。ひとつは『クリニカル・クラーク・シップ』といい、インストラクターの指導により簡単な作業から複雑な作業へ順にさせてもらう方法である。東歯大や神歯大などはこの方法であった。

インストラクターは研修医に簡単な作業を行なわせ、次のステップでインストラクターが作業を引き継ぎ、仕事を完了する。研修医には同じ難易度の作業を繰り返させる。

インストラクターはその研修医がその技術を十分修得出来たと判断すると、さらに難しい作業まで行なう事を許可する。

もうひとつの方法はマネキンを使用して擬似体験を行なわせる方法である。

東京高等歯科医学校（現東医歯大）が昭和3年に開校すると島峰徹は長尾優を米国へ派遣し、歯科治療教育を勉強させ、マネキン実習を日本へ導入した。当時の他の留学生はシニアクラスから入学したので実習で使っているマネキンの事は知らなかった。昭和4年には全部の臨床講座にマネキンがそろっていたという。しかし使用法はそれなりに難しかったようだ。

榊原悠紀田郎先生は昭和29年東医歯大に赴任し、歯科衛生士教育にマネキントレーニングを実施しようと考えた。ところが東歯大出身お榊原先生はマネキンを使用した事がないので東医歯大内の他講座の臨床実習を見学した。ある講座で上顎を下側にして実習をしていた。榊原先生はこれをみてミラーテクニックまで修得する必要があると思った。その前、昭和26年に榊原先生は浅草の池谷初

太郎の診療室を見学し、ミラーテクニックを教わっていた。池谷は有名なブラックの息子に米国流歯科治療を教わっていた。

おそらくどこの歯学部も実技教育において臨床実習はマネキントレーニングを行い、卒業研修はクリニカル・クラーク・シップで対応することになるのではないかと思う。

マネキンを手に入れることは容易であるが、クリニカル・クラーク・シップを行なうためには患者が多い卒業研修の場を提供する必要がある。

平成以後、歯科大学を卒業した歯科医師は治療に直接携わっていないと言う。それは大学病院の患者が少ない事が原因である。見学も十分に出来ないという。卒業した人へのある調査では人間の口で印象を取った事がない人が60%以上、人間の口の中に一度もハンドピースを入れた事がない人も60%以上であった。

もうすぐ神歯大の研修センターが稼動する。既に昨年初めに歯科来院患者数は治療を供給できる能力を超え、同窓会員には新規の患者紹介を控えるよう知らせが来ている。また患者さんの評判もいい。協力的な患者さんに恵まれたこの場で、うまくいけば歯科医師の技術的な向上を飛躍的に図ることができる。

数年前から東医歯大やその系列の私大歯学部は実習に力を入れている。神歯大の研修担当者はいろいろな学習法を検討されている事だろう。研修センターを活用して更なる卒業生の技術向上に取り組んでいただきたい。

（7回生 伊佐常樹）

## 70年代ヨコスカグラフィティ

鈍色に光る器具をアルコールランプで炙りその先に濃い紫色のワックスを溶かし取る。それを石膏模型の上に少しずつ積み上げていくという細かな作業もマニュアルに沿って続けていくうちに何の意味も持たず何の価値もないと思われたワックスの棒が美しいカーブを描き、精緻に満ちた溝を掘られ少しずつ歯牙としての形が施されてゆく。

彼の技量はまだまだ未熟で出来上がりには少し歪みもあるし形も変なのだが初めて作り上げた彼の目には我が身の分身のように愛おしく美しく見えた。そして「ふう！」と満足のため息をついた。

あとは実習室の前に座る助手にチェックを受けステップごとの印鑑をもらえば次の作業に進む事が出来る。

助手達は白い糊をきかせた長い白衣を着て実習室の前に陣取っている。いま思えばたかだか2、3年の臨床経験しかない歯科医師なのだが、まだ学生である彼との差はそれこそ天と地ほど大きかったし実習のステップをチェックし、ステップを進める許可をだす押印という絶対的な権力をもって彼の前に立ちはだかっていた。

そして彼らはすべてを知り尽くしている様な素振りで学生達の出来上がりの不具合を指摘し、「輝きが足りないなあ」などと訳の分からない事を言い出す輩だったのだ。

自分としては満足できる仕上がりにこれなら助手もOKをくれるだろうと彼はシゲシゲとワックスの塊を見つめながらふと最後の工夫を思いついた。

その工夫とはワックスで作ったそれをガスバーナーの火に一瞬くぐらせるといったテクニックだった。そうする事でワックスの表面の細かな凹凸が融かされて移行的な自然な曲面に仕上がるといったものだった。

もちろんそんなテクニックは実習のマニュアルにはない。しかし学生達の間では、たとえば婦人物のナイロンのストックキングがワックスのつや出しのためにすべての学生の工具箱の中に入っているように、先輩達から伝えられた裏技というような細かなテクニックがあつてこれもそんなもの一つだった。

技工士の経験のある級友が作り上げた見事に輝

くワックスアップを見て彼は決心した。

「そや！バーナーでひと炙りや！」

ガスバーナーに火を付けて青く輝く火に少し目を細めながらワックスアップに向かった。低い音を立てながら燃える「青い炎」を一瞬のタイミングを計りながら当てたのだ。

その瞬間とんでもない事が起きた。

午後の実習時間いっぱいを使って仕上げた彼の分身ともいうべき愛する作品が一瞬にしてその形を失い融けて流れ落ちてしまった。

すでにそれは形を失い何の意味も持たない薄っぺらなワックスの層として石膏模型の上に広がってしまった。

彼は声にならない声を挙げ、その時、時間が止まったように思えた。

「なんね？これ！一体なんね？」

このテクニックを使うとき大事な事はバーナーに空気を送るバルブを絞って炎の温度を下げて炙るという事だ。高温の炎ではワックスが融けすぎてしまう。その大切な要点を何故か彼は知らなかったのだ。

限られた時間の中でマニュアルに従いステップをこなしていく実習に余裕はない。一日分の遅れを取り戻す事は絶望に近いのではないかと？

「どぎゃんするとですか？」

と考えれば考えるほどに焦りが焦りを呼ぶ。

次に彼の取った行動をどう説明すればいいのだろうか？常軌を逸したというには至極当然の事のようにも思える。彼は荷物をまとめると実習室の「窓」を乗り越えて帰ってしまったのだ。

この話はどの回期にもある学生時代の笑い話として語り継がれている話で仲間が集まれば昔話として何度となく話されその度に皆が腹を抱えて大笑いする話だ。幸いにもいささか不器用な彼も学力に優れ人一倍の努力により世に名をなす立派な歯科医師になっている。それだけに話に尾ひれが付き語り継がれてきた。

ある先輩が同期の友人について「俺はあいつと18の時から一緒なんだ」と言った。一瞬「へーっ！」と感心したのだが考えてみれば自分の友人達も皆そうだ。歯科大学同窓というかなり特殊な世界においてお互いが多感な時をともに過ごし今も同業という繋がりを持っている。そんな友達を持てたという事はかなり幸せな人生だと思うのだ。

(9回生 外池利夫)